

10分講話 －祈り（Ⅲ）－

【音声】10分講話 祈り 第3回 「誘惑」－祈りのなかの困難

前回はアピラのテレサの言葉を借りながら、祈りとは神と語りあいながら神との友情を深めていくことだとお話ししました。けれどその最後のところで少しふれたように、祈りには困難がつきまといます。今回はわたしたちが必ずと言ってよいほどつきあたる祈りにおける難しさをとりあげ、それにどのように向かい合えばよいのかについて簡単なヒントをお伝えしたいと思います。

■はじめに

最近、念祷を始めたわたしの友人からメールがありました。祈ろうとしてもすぐに他のことが頭にうかび、集中することができない。時間ばかり過ぎていくようでいったいわたしは何をしているのかかと思ってしまう。しかも祈っても祈っても自分のなかの汚れはとれない、というような内容でした。

おそらく祈りを始めた方は遅かれ早かれ出くわす困難で、わたしもまたご多分にもれず通った道、というより今も通っている道なのです。今回はその友人へのエールとしてお話します。

福音書には「祈れない」人間の典型的な姿が描かれている場面があります。ゲッセマネの弟子たちの姿です。イエスが受難を目前にして苦しみ悶えている間、目を覚ましているようにというイエスの言葉にもかかわらず弟子たち、しかもイエスから特別に選ばれた三人の弟子たちは眠ってしまいます。その場面をマルコ福音書からとりあげましょう。そしてそこに描かれた弟子の姿をとおして、わたしたち人間の祈ることのできない弱さを見てみましょう。

■ゲッセマネの弟子

イエスは弟子たちにご自分が御父に祈っている間、「目を覚ましていなさい」と求められます。この言葉は三回繰り返されます。けれど弟子たちは度重なるイエスの願いにもかかわらず眠りこけてしまいます。聖書のなかで同じ言葉が三度繰り返される時には、単に三回という事実を表現しているだけではなく、何度も何度もということですから、この場合も弟子たちはイエスの願いにまったく応えられなかったということを表しているのでしょう。しかもこの「目を覚ましている」という言葉は、「眠っておらず、起きている」というだけではなく、意識的に注意をしている、あるいは靈的に目覚めているという意味ですので、眠りこけた弟子たちは、今、目の前で起こっているイエスの苦悶の意味をまったく理解していないということなのです。イエスはその彼らに対して、「誘惑に陥らないように」と告げられます。「誘惑に陥らないように」という表現はどこかで耳にしたことがありますね。そうです、「主の祈り」のなかにある「誘惑に陥らせず」という言葉です。この「誘惑」は神がその子どもたちを成長させるためにお与えになる「試練」ではなく、悪魔が人間を破滅させるために陥らせる罠ですから、その誘惑を避けるには、「目覚めて祈る」必要があるのです。ですから目覚めていられなかったゲッセマネの弟子たちには、眠かったという肉体の必要性だけではなくさらに深い次元の弱さがあったと思われるのです。イエスが苦しまれるのを見るに堪えられなかったこともあるでしょう。わたしたちの心にとって人の苦しみを見るのはとても辛いものです。そしてそれ以上に、弟子たちはイエスの戦いの意味、イ

イエスが受けておられる誘惑の意味をまったく理解できなかったのではないのでしょうか。

イエスはさらに、弟子たちの代表であるペトロに向かっておっしゃいます。「心ははやっていますが、肉体は弱いものだ」と。この言葉から、人間には心と肉体の二つの要素があり、心が燃えていても、弱い肉体はそれに伴わないという意味に理解しないようにする必要があります。ユダヤ人たちは人間をトータルで考えました。人間は全体として善に、あるいは神に向かう面と、全体として肉に、つまり罪に向かう面があるということです。言い換えると人間は常にこの両方の力の板挟みになって引き裂かれているということなのです。ペトロはこのゲッセマネでのイエスの苦悶の直前に、イエスに対して勇ましい言葉を告げていました。イエスはペトロが、イエスの受難に際して三度イエスを否認するだろうと予告されました。その言葉を受けてペトロは、「たとえ、あなたとともに死ななければならないとしても、決してあなたを知らないとは言いません」と断言し、他の弟子たちも同じように言ったと福音書は語っています。ペトロは単純で熱しやすい人ですから、この言葉を言ったときには決して嘘ではなかったことでしょう。イエスと共に死ぬ覚悟であったというのは本当に違いありません。けれどペトロはまだ自分自身を、というより人間本性の弱さがどれほどのものであるかを十分に理解していなかったのです。

■祈りのなかの困難

このように、ゲッセマネでのイエスの苦悶という救いの歴史のなかでは決定的に重要な意味をもつ場面においてさえ、弟子たち、ひいてはわたしたち人間は目覚めて祈っていることができませんでした。イエスの孤独の深さはどれほどだったことでしょうか。けれど主はその弟子たちを非難されません。

「もう眠って、休みなさい」という言葉を彼らにかけられます。そして弟子たちの代表者であるペトロはこの後さらにイエスを三度拒むという体験をします。この度重なるペトロの失態とそれを通した自らの徹底的な弱さの体験、そしてそれをもゆるされたイエスのあわれみの体験は、彼がやがて教会の頭となったときに、かけがえのない貴重なものとして教会全体の宝となることでしょう。

さてわたしたちは祈りについてここから何を学ぶのでしょうか。一言でいえば、「心ははやっていますが、肉体は弱い」ということです。そしてそれをイエスは咎められません。わたしたちがどのような者か主はよくご存じです。目覚めて主と共にいたいと願っても、主と友情の語り合いを続けたいと思っても、やがては「まぶたは重くなる」のです。ではどうすればよいのでしょうか。

前回、アビラのテレサの言葉を借りて祈りとは「友情の交換」であるとお話ししました。テレサによると、わたしがイエスと向かい合い、二人だけでたびたび語り合うのが祈りだということでした。このような祈りの際に起こってくる困難は大きくいうと二つあるように思われます。ひとつは徐々に気が散っていくということ、もうひとつは、イエスと語り合うはずなのに、いつのまにか自分のモノローグに終わっているということです。イエスからの語りかけは、イエスからの応えは本当にあるのでしょうか。

ところでテレサもまた気が散ることですぐいぶん悩んだと知れば、わたしたちにとっても大きな慰めです。すでにお話ししたように、テレサは当時の一般的な祈りの形であった黙想、つまり色々と考えをめぐらして福音書から、あるいは教会の教えの中からじぶんにとって実りある結論を引き出すという祈りがたいへん苦手でした。彼女はもっと自由にイエスを探し、イエスと共にいることを望んだのです。けれど自由であることはその代償を伴います。彼女の知性や感情もまた自由に飛び回るのです。それに対

して彼女がとった対処方法は、祈りを準備するということでした。わたしたちにもとても有益なことだと思います。たとえば福音書や信仰に関わる本の一節を読む、イエスや聖人のご絵をながめる、あるいは自然のなかにその足跡を残されている神を思うなど、いずれかの方法をとって、飛び回る知性や感覚を主に向けていきます。テレサはこのような手段なしでは念祷に赴くことができなかつたと語っています。ではこれでもう問題はないのでしょうか。残念ながらそうとも言えないのです。再び気が散る、あるいは考えや心が別のところに飛んでいくということが起こるかもしれません。そのときはもう一度、さらにまたもう一度繰り返せばよいのです。神がわたしたちを捉え、ご自分のところに引き寄せるために知性や感覚を鎮めてくださるまで。

二つ目の困難である心の乾燥、つまり主の応えがまったくわからず、まるで自分だけが取り残されてモノローグを続けているような状態になったときには、どうすればよいのでしょうか。このような人に対して、マリー・ユージェーンヌ神父はとても実際的な言葉でわたしたちを励まします。

念祷のときにわたしたちが会う難しさは、神がわたしたちにご自分を与えてくださらないという印象をうけることです。孤独を感じます。神が働いてくださっているという実りが見えないのです。念祷を続けることに挫けてしまうのは、たいていの場合、自分は（神がおられず）一人であると思うことが原因です。自分のそういった印象にとらわれてしまうのです。このようなときには、念祷の実りは、神と人間の双方の関わり合いの実りであるという信仰を新たにする必要があります。

ときには死にも似たこの乾燥状態にあって、わたしたちはすべてのものから信仰を解き放ち、まっすぐに神に向かって目覚めさせておく必要があります。電波をとらえるためにたてるアンテナのように、無限の神からやってくる波長をとらえるために世の中のあらゆる騒音を越えて信仰をうちたてなければなりません。

■信頼のうちに目ざめて

神はわたしたちの感覚や知性に捉えられる方ではありません。聖書はたびたび「隠れた神」について語っています。その神と共にとどまることは信仰の闇のなかにとどまることです。ここにおいて信仰がたいせつな役割を果たします。そして希望のうちに忍耐し、「この忍耐とともに信頼に満ちた根強い謙遜が伴わなければならない」とマリー・ユージェーンヌ神父は強調します。自分に過信して眠りこんでしまったゲッセマネの弟子たちのようではなく、信仰・希望・愛のうちに目覚めて神のときを待つには、自分の力に頼ることのない謙遜がぜひとも必要なのです。けれどなぜここまでして祈らなければならないのでしょうか。それは祈りとは究極、神の喜びのためであり、その祈りのときのなかで神はわたしたちをご自分に似た者に変えてくださるからなのです。それは常に喜びに満ちたときとはかぎりません。神の前での自分の罪や欲望という汚点に気づき隠れてしまいたくなるかもしれません。でも大丈夫です。主はわたしたちがそのような者であることをよくご存じです。わたしたちがそれを見て遜り、自分に信頼をおくことをやめて子どものように御父の腕に身を投じるなら、それこそ神が何にもまして待っておられることに他なりません。

ゲッセマネにおけるイエスの孤独を、わたしたちの小さな、そして貧しい祈りで和らげるために、たとえ居眠りをしたとしても再び起き上がって主に寄り添う謙虚さをもちたいと願います。

